

【巻頭言】

附属動物実験施設長

芹川忠夫

平成7年3月から隔年に纏めてきた「附属動物実験施設報」の第9号を発刊するにあたり、附属動物実験施設の現状を紹介する。

本附属動物実験施設は昭和47年に設置され、昭和49年から動物実験施設棟の利用が開始された。その後、平成15年から増改築された現在の動物実験施設が使用されている。平成19年度から「京都大学における動物実験の実施に関する規程(2007年12月一部改訂)」に基づき、共同利用の(動物)飼養保管施設と(動物)実験室を一体管理する体制が整い、現在に至っている。

本動物実験施設では、マウス、ラット、ウサギ、ブタ、イヌ、サル類等の多様な実験動物が医学研究科の基礎・臨床分野の教員と大学院生らの研究に幅広く利用されている。その中には、遺伝子組換えマウス、ラット、あるいはウサギが含まれ、「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律」、いわゆるカルタヘナ法に基づく管理がなされている。

実験動物の飼育実験設備を整備することは、動物のみならず従事者の労働安全衛生を十分に考慮したものが求められ、年々改善してきた。マウスやラットを利用する研究プロジェクトのニーズは常に高く維持されており、マウスを利用する産学連携の大型プロジェクトも新規に開始されることになった。これを機に、動物実験施設棟の地下1階を模様替えして、SPFマウス領域を増設すると共に、地下2階の洗浄滅菌室に大型の高圧蒸気滅菌装置を追加設置した。附属動物実験施設の運営経費の不足を補うために、平成15年以来据え置いていた飼育管理単価を平成22年度に一律10パーセント値上げした。利用者数の減数を懸念したが、利用数に大きな変化は生じなかった。

研究開発施設共用促進費補助金、ナショナルバイオリソースプロジェクト「ラット」(NBRP-Rat)は、京都大学を中核機関としており、その事業主体は本附属動物実験施設が担っている。ラットの収集・保存・提供を行う本事業は、国内外のラット研究に貢献していると高く評価されている。

附属動物実験施設はフル稼働の状態にあり、利用者の研究成果は本報にリストされているように、極めて大きい。医学研究科に欠くことができない附属動物実験施設の維持、運営あるいは拡充に、引き続き、ご支援、ご協力をお願いする。